

文春図書館

特別版

「戦争を考える本」座談会

森本敏・橋爪大三郎・青山南 司会・構成 宮崎哲弥

推薦書

クラウゼヴィッツ
『戦争論』(全三巻 岩波文庫)
郷田豊・李鍾學・杉之尾宜生・川村康之
『「戦争論」の読み方』(芙蓉書房出版)
村松剛
『湾岸戦記』(学習研究社)
児島襄
『太平洋戦争』(上・下 中公新書)
児島襄
『東京裁判』(上・下 中公新書)
佐々木春隆
『朝鮮戦争』(全三巻 原書房)
入江隆則
『敗者の戦後』(中公叢書)
田原総一郎
『日本の戦争』(小学館)

森本敏(もりもと・さとし)
1941年生まれ。防衛庁、外務省を経て、拓殖大学国際開発学部教授。著書に『安全保障論』(PHP研究所)、『「極東有事」で日本は何ができるのか』(同)等。

森本 大統領はAの限定作戦かBの戦域拡大かという選択をしたわけではなく、AからBへという選択をした。というのは、イギリスのブレア首相が、戦域を拡大するのは絶対的にやめてくれと限定作戦にこだわったのです。イギリスは後のアラブ社会との関係を考え、国益上、戦域を拡大できない。

橋爪 アメリカが抱えている矛盾は何かを

が三つあるのみです。その要諦を解説すると、科学技術の優位性を最大限に活用し、アメリカの兵員を殺さないというノー・カジュアルティの戦略が第一。第二に、コスト面の要請もあり、前方展開勢力を縮小し、機動性を重視する戦略。つまり、兵力をアメリカ本土に拘置し、軍事科学技術を使っている展開すればよいという考え方で

かれています。森本 アメリカとアフガンとの戦いは、まさにRMAの非対称戦です。第一期の限定作戦が成功するかどうか、その有効性が問われています。宮崎 これから実証されるわけですね。ところで第一期という表現が指すものは何ですか？森本 国務省はタリバン、アルカイダという限定目標に向けてだけの作戦を主張していますが、国防総省は今でも大反対で戦域拡大を主張しているのです。

宮崎 パウエルを中心とした国務省とラムズフェルドを中心とした国防総省との間に対立があると言われている。森本 大統領はAの限定作戦かBの戦域拡大かという選択をしたわけではなく、AからBへという選択をした。というのは、イギリスのブレア首相が、戦域を拡大するのは絶対的にやめてくれと限定作戦にこだわったのです。イギリスは後のアラブ社会との関係を考え、国益上、戦域を拡大できない。

推薦書

『コーラン』(全三巻 岩波文庫)
『ハディース』(全六巻 中公文庫)
アハメド・ラシッド
『タリバン』(講談社)
モハンマド・ハタミ
『文明の対話』(共同通信社)
山内昌之
『イスラームとアメリカ』(中公文庫)
宮田律
『現代イスラームの潮流』(集英社新書)

橋爪大三郎(はしづめ・だいさぶろう) 1948年生まれ。東京工業大学大学院教授、社会学者。近著に『世界がわかる宗教社会学入門』(筑摩書房)、『政治の教室』(PHP新書)等。

宮崎 同時多発テロを受けたアメリカによるアフガンに攻撃は、いよいよ地上戦へとという局面を迎えています。テロリズムに対して行われる報復戦争は前代未聞です。加藤朗『現代戦争論』では「低強度紛争」という表現を使い、二十一世紀の戦争はかつての国家間の戦争から、亜国家主体(テロ組織、ゲリラ集団等)と国民国家の戦争へ変貌してゆくと指摘しています。が、やはりこれは「新しい戦争」の濫觴なのではないでしょうか。

青山 戦場がないというより、アメリカは今初めて自分の国の中に戦場を抱えてしまったと言った方がよいかもしれません。しかも炭疽菌がばらまかれるに至っては、アメリカ国土全体が現代社会の非常に不気味な恐怖を孕んでしまいました。森本 アメリカの領土は南北戦争以降の約五十年間、深刻な侵略を受けていません。したがって米国の国防政策は、米本土に脅威を与え得る敵を領域

推薦書

ファースティマ・メルニーシー
『イスラームと民主主義』(平凡社選書)
チャルマーズ・ジョンソン
『アメリカ帝国への報復』(集英社)
上杉忍 『二次大戦下の「アメリカ民主主義」』(講談社選書メチエ)
ジョン・グレイ
『グローバルイズムという妄想』(日本経済新聞社)
加藤朗
『現代戦争論』(中公新書)
浅田彰
『歴史の終わりを越えて』(中公文庫)

宮崎哲弥(みやざき・てつや) 1962年生まれ。評論家。著書に『身捨つるほどの祖国はありや』(文藝春秋)、『正義の見方』(新潮社)等。共著に『日本経済「出口」あり』(春秋社)等。

森本 九月二十七日の「ニューヨーク・タイムズ」に、ラムズフェルド国防長官が論文を発表し、「ア・ニュー・カインド・オブ・ウォー(新種の戦争)」とは何かについて説明しています。私の説明は、第一に主体。相手は主権国家でなく、集団あるいは組織、ネットワーク。第二に手段。従来の軍備、軍事力、兵器を用いるのではなく、今回の凶器は民間航空機であった。第三に目的。領土の確定あるいは主権の確立といった明確な目的が存在しない。したがって開戦もなければ終戦もない。そして最後に、戦場が存在しないことです。

青山 無防備もいいところですね。森本 そうです。百四十万人の現役兵力があるにもかかわらず、あのような脅威に晒された。ブッシュ大統領は今回の事件後、「ザ・オフィス・オブ・ホームランド・セキュリティ」という本土安全保障局なるものを設置し、建国二百五十年にして初めてホームランド・ディフェンス(本土防衛)などと言っているわけですね。

推薦書

ジョーゼフ・ヘラー
『キャッチ=22』(上・下 ハヤカワ文庫)
マイケル・ハー
『ディスパッチズ ヴェトナム特電』(筑摩書房)
ティム・オブライエン
『カチアートを追跡して』(新潮文庫)
ティム・オブライエン
『本当の戦争の話をしよう』(文春文庫)
ロバート・O・バトラ
『ふしぎな山からの香り』(集英社)

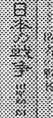
青山南(あおやま・みなみ) 1949年生まれ。翻訳家。主な訳書に『血の雨』(東京創元社)、『ゼルダ・フィッツジェラルド全作品』(新潮社)。近著に『南の話』(毎日新聞社)等。

アメリカによるアフガン攻撃は激しさを増し、世界は炭疽菌の恐怖に覆われている。新しい戦争の行方は「文明の衝突」なのか？ 終わりはあるのか？ 日本人の対応は？ 軍事、宗教、アメリカに造詣の深い識者を招いて、「本」を通じてこの戦争を思考する。

か？ 終わりはあるのか？ 日本人の対応は？ 軍事、宗教、アメリカに造詣の深い識者を招いて、「本」を通じてこの戦争を思考する。

必要があるのですが、ここにアメリカの矛盾がある。宮崎 現時点でイスラーム諸国とアメリカの協調は一応成功しているように見えます。が、このまま事態を座視しているように思えます。ハンチントンが『文明の衝突』(集英社)で予言したようなアメリカ対イスラーム世界という事態に「発展」しないでしょうか。

橋爪 それは最悪のシナリオで、アメリカにとってもイスラーム諸国にとっても全くハッピー



特別版

宮崎 しかし、ピンラディンは聖戦を呼び掛けています。そもそも、自爆テロあるいはアメリカに対する戦争というものをイスラムの伝統的な考え方の中で肯定できますか。

しかし、ここにひとつ難しい問題があります。イスラム社会は一体性が強く、キリスト教社会のようにずたずたになっていない。緩やかだが強固な団結がある。キリスト教に存在する破門という考え方も、手続きもないのです。ということはムスリムの中に過激派が出て来た時、これを破門してコントロールする方法がないということになる。

今、インドネシアやパキスタンで若者たちが興奮して反米デモを行っています。しかしそれは、イスラムの問題というよりも、政治・社会・経済的なその

宮崎 これは本質的な宗教問題ではないと？

青山 いや、偏見以前に、何も知らないという方が正しいでしょう。私の挙げたティム・オブライエンの『カチアートを追跡して』は厭戦気分を代表する作品ですが、主人公がベトナム戦争が嫌になってパリに向かって逃亡する。カンボジアを抜けてずっと進んで行き、途中で中東を通りますが、ほとんど数ペーじで通り過ぎる。つまり、この人にも書けない、想像力が働かないのです。

青山 アフガニスタンでも地上軍が入り戦死者が出るということになれば、アメリカでも厭戦気分は出てくるでしょうね。

イスラム教は、今、三つの大方向を遣っている。一つは、イスラム教の教義を、国際世論が変化するにつれて、ね返ってくる。二つは、イスラム教が、国内にも保たれるように、カジュアルテの反対です。三つは、イスラム教の教義を、国内にも保たれるように、カジュアルテの反対です。

宮崎 哲学者のリチャード・ローティも、アメリカの国論が

橋爪 『コーラン』と『ハデ

J・アップ

J・アップダイクの危惧

青山 ベトナム戦争は、アメ

ジョーゼフ・ヘラーの『キャ
ッチ22』は第二次大戦下イタ
リアのアメリカ空軍を舞台にし

青山 おっしゃる通り、この

橋爪　そこで、オープン・ソ

森本　ところが今回はアメリ

か、そういうものが傷ついたま

青山 ええ、今回アメリカ人

橋爪 日本^の天皇機関説と似

イクの危惧

これからアフガニスタンで地

てから現地に入った特派員の報告ですが、これが戦場なのかという目茶苦茶な様子を描いてい

の知らないものでした。しかも

たオープン・ソサエティではな

森本 アメリカがスーダンや

橋爪 何もしないよりはまし

ないテロリストや敵国に見せつけておくことが日本の国益にな

を作ったのは有名な話です。さ

とはできるのでしょうか。

森本 いま新聞は「地上戦」と書いていますが、あれは寺珠郎

アメリカは過去十年間の戦争

森本 この問題に取り組むべ

は日本の身勝手なわがままを法

橋爪 最後に、ビンラディン

と持続してしまふことを危惧します。